

「近世スペイン社会の一考察—命名の分析をとおして」

A Study of the Modern Spanish Society through an Onomastic Analysis

芝 紘 子

Hiroko SHIBA

キーワード：キリスト教系名、教会、近世スペイン社会

Key words: Christian names, Church, modern Spanish society

要約

姓名システムや命名行動には、それぞれの時代における社会・文化の諸事象が大きく影響している。しかし、姓名システムが歴史的・文化的含蓄を有するというこの認識はきわめて新しく、歴史学が姓名を研究対象とするようになったのは近年にすぎない。

小論においてはまず、前センサス時代の18世紀中葉にスペイン王国で実施された、西ヨーロッパ最大の世帯調査史料（既刊）を用いて、大中小の11市町村における使用個人名を数量分析して最頻名を割り出し、次に、そこから社会的・文化的動向を読み解くことを目的とする。

この分析から、対抗宗教改革のスペイン教会が17世紀にそれまで民衆に馴染みのないヨセフへの崇敬を奨励し、18世紀にはますます高揚するマリア崇敬から本来のイエス信仰に民衆を引き戻そうと施策していたことを垣間みることができる。

Abstract

Various social and cultural phenomena influence anthroponimical systems and onomastic behaviors in each society. Yet, the perspective that anthroponimical systems contain historical and cultural subtexts is relatively new, as historians have just recently begun to study this subject.

This article has two objectives: first, to quantitatively analyze popular names in eleven Spanish cities, towns and villages, based on published documents of the Western Europe's largest-scale household survey in the pre-census era, which was carried out in Spain in the mid-18th century; secondly, to observe and discuss the social and cultural context, based on the quantitative analysis.

This analysis will provide insight into the Spanish Church's counter-reformation strategies. These strategies promoted veneration for Joseph, in the 17th century, which

had been unknown to the people until then, and induced people to properly believe in Christ during the 18th century, attempting to bring them back from ever-intensifying veneration for Virgin Mary.

はじめに：姓名システムが含蓄する歴史の意味

姓名システムがもつ歴史の意味が認識されるようになったのは、ここ30年ほどのことにすぎない。姓名の研究はそれまで命名学と称されて言語学者の範疇とされ、もっぱら姓名の由来や意味が調べられてきた。近年、歴史学が姓名システムを研究対象とするようになったその背景には、歴史観・歴史方法論の変化がかかわっている。20世紀30年代以降、それまでの国家や体制、社会の形態や経済システムといった、いわば枠組みの研究、あるいは法制史・外交史・経済史・物価史・文化史・美術史と数限りなく分断された細切れの研究からは、本来歴史学が対象とすべき、トータルな存在として生きた人間たちの生の姿が捉えられないのではないかという疑問がアナー学派から呈された。匿名の人びとの日常生活・世界観・心性・文化の潮流といった、いわばソフトの側面の把握なくして、ある社会の歴史を深層から理解することはできない、とするその歴史観が共感を呼び、20世紀後半には歴史学の主流となるにいたった。目線を人間に向けるこの歴史観は、それまでの研究では一揖だにされなかった、社会のありとあらゆる事象が研究対象となる。絵画、娯楽、気候、食事、生活空間、家族、愛、死、遺言、子ども、女、夢、身体、音、におい、ファッション、等々。こうした諸事象は一見するところ、人間生活のごく一部を成すにすぎない。しかし、そこには無数の環境的・社会的・経済的・心性的・文化的・政治的変数がかかわっていることが次第にあきらかになってきている。逆に言えば、一見些細なこれらの事象は、ある時代・ある社会の本質的特質を解き明かす、有効な手立となりうる。

こうした新しい歴史観・方法論の潮流のなかで、姓名システムも歴史的考察の対象となった。西欧人が今日用いている姓名システムが中世に源をもつことは漠然と知られてはいたが、具体的なプロセスは不明であった。西ヨーロッパのほとんどの地域でほぼ同時期に展開をみた、この姓名システムの誕生を組織的に研究しようという機運が1980年代後半に生じ、フランスの研究者の呼びかけで国際会議が開催されて、効果的な方法論が討議された。その最初の研究成果、『現代姓名の中世における起源 *Genèse médiévale de l'anthroponymie moderne*』が世に問われたのが1989年であった。スペインにおいてもフランスの研究者と積極的な交流がおこなわれ、「近代の姓名の中世における起源—イベリア半島と南フランス」と冠する共同研究が立ち上げられた。その一環として実施された研究の成果は、論文集『姓名と社会—9～13世紀におけるイスパノ・キリスト教徒のアイデンティティ・システム』(Martínez Sopena, coord., 1995)として1995年に刊行された。おおよそ850～1200年間について、いまだイベリア半島北部に限られていたキリスト教圏(中央部・南部はイスラーム圏)における姓名システム誕生期の動向を、歴史的独自性

がきわめて強い数地域¹に分けて、おもに修道院・教会に残る史料にもとづいて分担調査したものである。遠く離れた日本においては、予てから興味をもっていた筆者がスペインの姓名システムに関する論文を最初に上梓したのは、奇しくも同じ1995年であった（芝, 1995）。その後、スペインでの上掲の新たな研究成果や既刊史・資料の分析を加えて何度か改稿し、日本とスペインで発表してきた（芝, 2001; Shiba, 2010）。それらにおいて、ひとつには、中世盛期のイベリア半島における名から姓への転換点である父称の誕生経緯をあきらかにするとともに、他の西ヨーロッパ諸地域との姓名システムの比較をとおして、その背後にある、半島の社会的・経済的・歴史的特質を捉えることに努めた。もうひとつには、現行法定結合姓の19世紀後半における誕生に関し、それまでに論拠なしに提示されていたふたつの仮説を史料にもとづいて、一方を論駁し、他方に論拠を与えた。残された課題のひとつである、近世以降の名の動向を小論の考察対象としたい。

1. 依拠する史・資料

小論においては、近世スペインに使用された個人名を調べ、そこからどのような社会的事象があきらかになるのか、いわば名前のもつ歴史的な意味合いの一端を引き出すことを試みたい。依拠する史料は、18世紀中葉に実施された「エンセナーダ世帯調査 Catastro de Ensenada」である。この史料自体については別稿（芝, 2004）で史料分析したので、ここでは概略にとどめる。累進課税による税の一元化・免税特権の廃止・王国国民の負担軽減を目的として、市町村の富と課税対象人口の調査が1750年から数年にわたり（平均実施年は1752年）、スペイン王国のうち、旧カスティーリャ王国地域にあたる22県14,500市町村で実施された（旧アラゴン王国およびバスク・ナバラは対象外）。調査は、耕地面積・農作物・商工業などにかんする市町村当局への40項目のアンケートと、家族構成・職業・資産など、個々の世帯への聞き取り調査からなる。しかし、後者については、調査内容・基準の不徹底や聞き取り資料をもとに当該市町村が世帯台帳を作成する際の内容削除にぐわえ、調査を推進した大臣の失脚、その資料のあまりにも膨大な量などのために調査結果がごく一部（それさえも、1975年にシマンカス古文書館で偶然発見された、アンケートの回答 Respuestas Generales や世帯台帳その他の史料だけで8万冊にのぼる）を除き中央政府に届けられず、各地方に散逸したまま放置され、現在でさえ全容が把握されていない。しかし、前センサス時代にあっては他の西ヨーロッパ諸国に類をみない大規模な世帯調査であり、人口の隠匿は約5%とされるものの、その史料的価値はきわめて高い。良好な世帯台帳には、家長以下、家族全員の名前・年齢・職業が記されており、当時の家族・世帯・社会を知るうえで第一級の史料となっている。ただし、現在までその史料が刊行されたのはわずか75市町村にすぎない。

その既刊史料にしても、アンケート回答部分のみで、世帯台帳が添付されていない市町村は半数にのぼる。回答自体も大胆に簡略化した記述など、書き方は千差万別であるが、職業別に就労

者が列挙されている所もある。こうした史料自体の制限にくわえて、対象市町村が地理的に偏向しないこと、またその規模も大中小とすること、さらに筆者の限定された集計作業時間などの条件下、小論においては、調査対象全地域の動向をおおむね把握できると思われる11市町村を選択し、それらについて名前の集計作業をおこなうこととした。図1は対象市町村の位置を示す。

図1. 本稿の分析対象市町村*



* ◎は人口10,000以上、○は5,000~10,000、●は2,000~5,000、▲は2,000以下

家族にかかわる世帯台帳の記述も統一性に欠け、家長以下全員の名前を記録する場合、家長名だけの場合、あるいは妻の名はあるが、子どもの名を一部（年少者）ないし全員記さない場合など、さまざまである。家長名のみ記載の不完全な世帯台帳、もしくはアンケートの回答中の職業別名簿を利用せざるをえなかった半数の市町村については、女の名のサンプルが信頼に足るほどの数に達しなかったため、本稿の分析の主対象は男の名とし、女の名については付随的に言及する。

2. 中世期におけるキリスト教系の名の登場

現代西欧人のなかでも、とりわけスペイン人の名の大部分は、キリスト教系の名で占められている。その経緯を、史料分析に入るまえに、説明しておこう。

西ヨーロッパにおいては一般に、狭い宗教界（教会・修道院関係）の外にあった俗界の民衆（おもに農民）がキリスト教化するのはようやく11~13世紀のことである。そのころ、改革修道

会によって聖人崇敬・マリア信仰が広く伝播されたことや、11世紀末にはじまったグレゴリオ改革が12世紀をとおしてゆっくりと各地域に浸透するにつれて、キリスト教会の権威が強化されていったことによる (Durany y Rodríguez, 1995)。

イベリア半島もこの潮流と軌を一にしているが、キリスト教にかかわる名の登場自体は西欧一般より2、3世紀早い。それは8世紀初頭以降、半島の大部分がイスラーム圏に編入されたことと密接にかかわってしよう。アル=アンダルス (イスラーム・スペイン) にキリスト教徒のまま留まった者たちのうち、9世紀中葉、一部の急進的信徒がイスラームに挑発的行為を仕掛けて自主殉教する風潮が過熱して、多数の「聖人」を輩出した一時期があった。そうした「聖人」たちの名 (ペラヨ、セルバンド、フスタなど) が半島北部に伝わり、俗界にも滲みだしていった (Martínez Sopena, 1995) からである。また宗教界を中心に西ゴート人の末裔意識が強く抱かれ、その王国の再興が夢想されたためであろう、西ゴート時代の聖人の名 (フェリックス、シプリアーノなど) も採用されていた (García de Cortázar, et al., 1995)。しかし、姓名システムが西ヨーロッパ規模で誕生し、大きな展開をみた中世盛期には、それらローカルな聖人の名に代わって、西ヨーロッパ共通の十二使徒や教皇の名や初期キリスト教殉教者の名などが広く採用されるようになった。半島諸地域間の格差は大きいですが、おおむね、ペドロ (聖ペテロ: 初代ローマ教皇)、ファン (聖ヨハネ) など、十二使徒の使用頻度がきわめて高かった。

10世紀ころから次第に浸透しはじめたこれらのキリスト教系の名は教区教会網が整備された12、13世紀には優勢となっていく。半島北部の西部・中央部 (レオン・カスティージャ王国地域) では²12世紀には使用名の50%、13世紀には70%を占めるにいたる (Portela Silva, et al., 1995; Durany, et al., 1995)。それに圧されて、それまで優勢だったゲルマン系は少数派となり、またローマ時代以来用いられてきたラテン系名はこの時点でほとんど姿を消す。後段で述べる近世における使用名との比較の意味合いで、12世紀第4四半期末時点での使用名の一例として、レオン大聖堂資料を示そう (表1)。使用頻度上位6種の名のうち、5位のアル=アンダルスでの殉教者ペラヨ、6位のゲルマン系のフェルナンドをのぞき、

1~4位まですべてキリスト教系である。なかでもペドロ人気は群を抜いており、サンプル全体の24%を占める。同名率がきわめて低かった中世前期とは打って変わって、11世紀半ば以降はゲルマン系にしても、キリスト教系にしても、少数の名への集中傾向が強まり、この12世紀末 (調査対象限度期) はそのピークにあった。この史料に登場する323人はわずか20種の名を分かちもつ。この6種だけで、全体の72%を占める。つまり10人中、7人はこれら6種の名のどれかであ

表1 レオン大聖堂資料 (1176-1200年)

	名・サンプル数	件数 (割合)
1	ペドロ	78 (24.1%)
2	ファン	41 (12.7%)
3	マルティン	38 (11.8%)
4	ドミンゴ	33 (10.2%)
5	ペラヨ	24 (7.4%)
6	フェルナンド	20 (6.2%)
計	20種・323人	234 (72.4%)

出典: Martínez Sopena, 1995, p.174 より作成。

た。

3. 近世前期におけるキリスト教系の名の優勢

中世後期以降も、キリスト教系の名の優勢はつづく。ルネサンス期には13世紀にほとんど姿を消したラテン系の名が復活し、またゲルマン系も一部存続はしていたが、キリスト教系の名が圧倒的多数を占める状況はさらに進行する。ことに16世紀中葉以降、対抗宗教改革のもとで信徒の誕生から死までを教会が全面的に管理する体制を整備していったことが、キリスト教系名の優勢にさらに大きく貢献したことは疑いえない。カトリック教会の制度・政策固めをおこない、対抗宗教改革の画期をなしたトリエント公会議（1545～63年）は不解消聖礼結婚制度の確立とともに、新生児の洗礼の制度化を決議した。教区洗礼簿の作成義務が浸透するにしたがい、洗礼が次第に徹底されていき、洗礼時に守護聖人の名が付された。イギリスなどでのように、洗礼名ミドル・ネームとは別に個人名ファースト・ネームをもつ習慣とは異なり、洗礼名の守護聖人や天使の名が唯一の個人名となる。新生児に命名するのは代父母ないしは両親であり、通常、崇敬する聖人の名を付ける。それゆえ、名の使用頻度を調べることによって、ある時代・地域において崇敬される聖人とその広がり具合、さらには崇敬の変遷をも知ることができる。

その教区洗礼簿にもとづいて17世紀の100年間における名の変遷を25年毎に追った、オレンセ（ガリシア地方）についての研究（Poska, 1998）は、以下に分析する18世紀中葉への途上の動向を知るうえで有効である（表2）。12世紀末時点での最頻使用名表（表1）に登場していた、

地方的聖人のペラヨや南仏トゥール司祭のマルティン（聖マルティヌス）の名は消え、西ヨーロッパ共通の福音主義者・使徒の名が上位を占める。ラテン系アントニオが復活し、人気が高まっていたことも、この表で確認することができる。

表2 オレンセにおける名の使用頻度順位（17世紀）

	1600-20	1621-49	1650-74	1675-99
ドミンゴ	1	2	3	6
ファン	3	1	5	4
フランシスコ	4	4	2	1
ペドロ	5	3	4	2
アントニオ	6	9	1	3
ホセフ	25	32	10	8
マヌエル	—	22	6	5

出典：Poska, 1998, p.86 より作成。

注目すべきは、ホセフとマヌ

エルの初登場とその加速度的浸透である。同世紀前半まではきわめて少なかったホセフ、あるいはそれまでほとんど使用されてこなかったマヌエルが、世紀後半には順位を急速に上げている。両名の本格的な採用は17世紀後半以降であったことを物語る。またホセフの綴りが、他の市町村ではフランス語の綴りそのままに Joseph であったが、唯一このオレンセでは登場当初から Josef であった。ポルトガル³境に位置し、フランス語の現地語（ガリシア語）化には慣れていたのであるかもしれない。

4. 18世紀中葉における11市町村での最頻使用名

まず北から南へ、先述した基準で選定した11市町村の世帯台帳もしくはその代替史料から割り出した、使用頻度の高い上位6つの単名（ひとつの要素から成る名）を挙げたのが、表3～13（3のみ他も記す）である。11市すべてにおいて、ラテン系のアントニオ以外、すべてキリスト教系が占める。なかでも、ペドロ、フアンは中世盛期以前から採用され続けてきた十二使徒の名であり、フランシスコはフランチェスコ修道会の説教活動によって13世紀以降に広まった名である。これらの聖人に対する崇敬が中世以来、近世が進んでも依然根強い崇敬を集めていたことを窺わせる。

表3 サンティアゴ・デ・コンポステラ（1752年）*

	名・サンプル数	単名(件数・割合)	複名(種類・人数)
1	フランシスコ	257 (9.4%)	6種・15人
2	ドミンゴ	222 (8.1%)	3・39
3	フアン	221 (8.0%)	12・51
4	ホセフ	215 (7.8%)	6・12
5	アントニオ	212 (7.7%)	4・5, 17・110
6	ペドロ	181 (6.6%)	6・11
小計		1,308 (47.6%)	37種・133人
計	2,912人	127種・2,748人	60種・164人

*「世帯台帳」がないため、「公職・職業リスト Lista de oficios públicos y empleos」を分類（85-171頁）。

表4 トゥイ（1753年）*

	名・サンプル数	件数(割合)
1	フランシスコ	46 (12.2%)
2	フアン	42 (11.1%)
3	ホセフ	35 (9.3%)
4	ペドロ	31 (8.2%)
5	マヌエル	30 (8.0%)
5	ドミンゴ	30 (8.0%)
計	52種・377人	214 (56.8%)

*「世帯台帳」はないが、「トゥイ市にかかわるリストと宣誓報告 Lista y relación jurada correspondiente a la Ciudad de Tuy」から、重複の多い水車関係を除き、分類（98-120頁）。

表5 セルベラ・デ・ピスエルガ（1752年）*

	名・サンプル数	件数(割合)
1	マヌエル	77 (24.0%)
2	ホセフ	32 (10.0%)
3	フランシスコ	21 (6.5%)
4	アントニオ	19 (5.9%)
5	フアン	16 (5.0%)
6	ペドロ	12 (3.7%)
計	64種・321人	177 (55.1%)

*「世帯台帳 Vecindario」を分類（35-129頁）。

表6 ポサ・デ・ラ・サル (1752年)*

	名・サンプル数	件数 (割合)
1	フアン	52 (11.9%)
2	フランシスコ	44 (10.1%)
3	ホセフ	40 (9.2%)
4	マヌエル	39 (8.9%)
5	ペドロ	23 (5.3%)
6	アンドレス	17 (3.9%)
計	59種・436人	215 (49.3%)

* 「世帯台帳 Vecindario」を分類 (115-143頁)。

表7 バリャドリ (1752年)*

	名・サンプル数	件数 (割合)
1	マヌエル	260 (18.8%)
2	ホセフ	152 (11.0%)
3	フランシスコ	131 (9.5%)
4	フアン	122 (8.8%)
5	アントニオ	67 (4.8%)
6	ペドロ	59 (4.3%)
計	97種・1,383人	791 (57.2%)

* 世帯台帳がないため、RGの項目中、33項の手工業者を分類 (168-248頁)。

表8 サン・セバスティアン・デ・ロス・レイェス(1751年)*

	名・サンプル数	件数 (割合)
1	マヌエル	47 (16.7%)
2	フランシスコ	32 (11.4%)
3	フアン	31 (11.0%)
4	ホセフ	30 (10.7%)
5	ペドロ	16 (5.7%)
6	アントニオ	12 (4.2%)
計	56種・281人	168 (59.8%)

* 「俗人世帯主台帳 Libro de los cabezas de casa de legos」を分類 (105-122頁)。

表9 タラベラ・デ・ラ・レイナ (1753年)*

	名・サンプル数	件数 (割合)
1	ホセフ	95 (14.0%)
2	フランシスコ	94 (13.9%)
3	フアン	84 (11.9%)
4	マヌエル	69 (10.2%)
5	ペドロ	45 (6.6%)
6	アントニオ	40 (5.7%)
計	74種・678人	427 (63.0%)

* 世帯台帳が添付されていないため、RGの32・34項の職業別従事者 (農業従事者は記載なし) を分類 (70-105、108-113頁)。

表10 フミーリャ (1755年)*

	名・サンプル数	件数 (割合)
1	フアン	116 (16.4%)
2	ホセフ	77 (10.9%)
3	ペドロ	71 (10.1%)
4	フランシスコ	61 (8.6%)
5	ミゲル	35 (5.0%)
6	アントニオ	30 (4.2%)
計	63種・706人	390 (55.2%)

* 世帯台帳の代りに掲載されている、「俗人土地所有者 Individuos hacendados en Jumilla del estado lego」を分類 (89-117頁)。

表11 カルモナ (1751年)*

	名・サンプル数	件数 (割合)
1	フアン	604 (22.8%)
2	フランシスコ	417 (15.7%)
3	ホセフ・ホセ**	250・16=266(10.0%)
4	マヌエル	218 (8.2%)
5	アントニオ	217 (8.2%)
6	ペドロ	206 (7.8%)
計	104種・2,652人	1,928 (72.7%)

* 「世帯主台帳の抜粋 Extracto del Libro de los cabezas de casa de Carmona」を分類 (83-131頁)。
**はじめて当地のみで、現在用いられている José が登場。

表12 ランハロン (1752年)*

	名・サンプル数	件数 (割合)
1	フランシスコ	98 (13.4%)
2	アントニオ	96 (13.1%)
3	ホセフ	91 (12.4%)
4	マヌエル	62 (8.4%)
5	フアン	59 (8.0%)
6	クリストバル	42 (5.7%)
計	62種・734人	448 (61.0%)

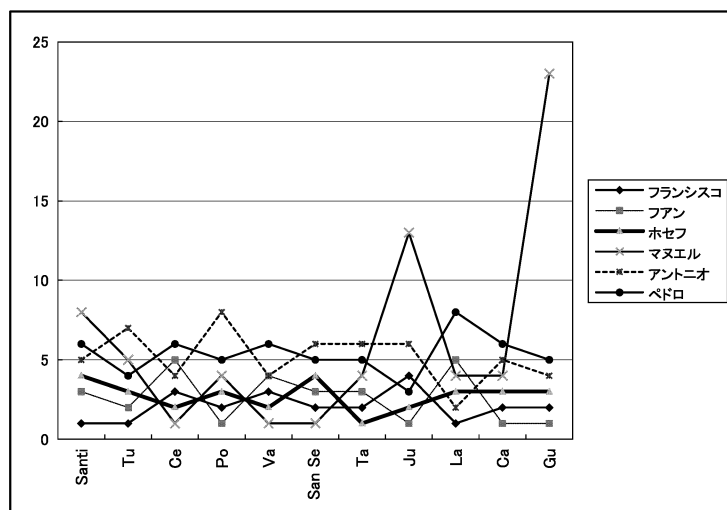
* 「世帯台帳 Libro de vecindario」を分類 (65-95頁)。

表13 グラサレマ (1752年)*

	名・サンプル数	件数 (割合)
1	フアン	445 (15.4%)
2	フランシスコ	360 (12.5%)
3	ホセフ	354 (12.3%)
4	アントニオ	185 (6.4%)
5	ペドロ	172 (6.0%)
6	ディエゴ	102 (3.5%)
計	79種・2,882人	1,618 (56.1%)

* 「俗人世帯主台帳 Libro de los cabezas de casa de legos」を分類 (127-252頁)。

グラフ 1 11市町村における最頻使用名6種の順位 (1751-55年)*



* Santi=サンティアゴ・デ・コンポステラ、トゥイ=Tu、セルベラ・デ・ピスエルガ=Ce、ボサ・デ・ラ・サル=Po、バリャドリャ=Va、サン・セバスティアン・デ・ロス・レイェス=San Se、タラベラ・デ・ラ・レイナ=Ta、ファミリーャ=Ju、ランハロン=La、カルモナ=Ca、グラサレマ=Gr

グラフ 1 は、11市町村における最頻使用の 6 名の順位を示したものである。フランシスコとフアンは全市町村で 6 位以内に入る。フランシスコは 3 市で 1 位、5 市で 2 位、2 市で 3 位、フアンも 4 市で一位、1 市で二位、3 市で三位ときわめて頻度が高い。他方、ペドロは三・四位が各 1 市、五・六位が各 4 市であり、中世盛期における 4 人に一人という突出した人気はすっかり影をひそめている。17 世紀にはすでに他の聖人と同レベルに下がってきており (表 2)、その凋落傾向が 18 世紀にさらに進行したといえる。ドミンゴも同様に、17 世紀の 100 年間で加速的に凋落し、18 世紀半ばにはガリシア地方のサンティアゴとトゥイ以外の 9 市町村では最頻 6 名から姿を消している。同地方は半島の西北端にあって、時代の潮流への同調が遅い、もしくは伝統への

固執がより強いといえよう。

5. 近世に導入された名の動向とその背景

(1) アントニオ

ペドロ、ドミンゴに象徴される、中世以来の伝統的なキリスト教系名の減少傾向とは対照的に、近世に復活ないしは新登場した名の躍進は著しい。ルネサンス期に復活を果たしたラテン系名アントニオが急速に浸透していった様相は、先述のオレンセにおける17世紀、とりわけ世紀後半の躍進（表2）に示されている。そしてこの18世紀中葉、大部分の市町村で相当の人気を博すまでになった。この名の特徴は、単名 nombre simple での使用もさることながら、ファン=アントニオのように複名 nombre compuesto（2つの名からなる結合名）⁴の第二要素としての使用頻度がきわめて高いことである。その典型はサンティアゴ・デ・コンポステラ（表3）。アントニオ=ロレンソのように第一要素としての使用が4種・5人にとどまるのにたいし、第二要素としては17種・110人にもおよび、突出している。人口約15,000（Santiago de Compostela 1752, 1990）を擁する商手工業都市での多数の同名者を区別するために、発音しやすい明るい音調のアントニオが多用されたのであろう。スペイン国立統計局資料（<http://www.ine.es/tnombres>）によれば、2009年時点でも完結名 nombre completo⁵としては全国で最多の使用頻度（1,000人中34.1）、単名と複名（構成部分）を合わせた場合には第2位（同67.5）を誇る。18世紀半ばにほとんどの市町村で上位を占めた（二位が1市、四位が2市、五・六位が各3市）ことをみれば、それ以後、現在までの250年間に増加の一途を辿ったのであろう。他方、ポサ・デ・ラ・サルは極端に少なく（2.8%）、時代の流行にたいする保守性が示唆される。現在も、使用頻度の高い南部とは対照的に、半島北部中央におけるアントニオ名の使用は最少である（上掲統計局資料）。

(2) ヨセフ

アントニオの復活に次ぐ新しい名の採用は、キリスト教系のふたつの名である。そのひとつはホセフ（ヨセフ）。4世紀末の聖書の正典選定時以来、意図的に排除されてきたヨセフを見直すとするキャンペーンが14世紀末以降フランスやイタリアの一部の大学ではじめられた。1481年にはヨセフの祝日（3月19日）が教皇庁によって定められ、16世紀の幕開けとともに、とりわけスペインの宗教界でヨセフ崇敬の気運が高まっていった。世紀半ばのトリエント公会議は聖人・マリア崇敬の奨励を決議し、ヨセフの名を例外的に幾度も言及した。その公会議決議が翌年に国法化されたスペインでは、16・17世紀に宗教人・道徳家たちがヨセフの重要性をさかんに喧伝し、ヨセフ崇敬の俗界への浸透に努めた。ヨセフは養父としてイエスに一番近く、イエスがもっとも愛した比類なき聖人であり、他の聖人たちとはちがひ、あらゆる願い事を受け止めてくれる「万能の聖人」である、と。

こうしたヨセフ見直し思潮のなかで、1580年代にヨセフ名がはじめて採用された。神の最大の恩寵を必要とする孤児たちに、教会人が命名したのである。1621年にはヨセフが列聖され、それ以降ホセフはめずらしい名ではなくなった（Villaseñor Black, 1995）。しかし1670年代末、バリャドリーのサルバドール教区住民の70パーセントがホセフだったのは教区司祭が主導した結果であるという（Rodríguez Martínez et al, 1985）。そうであるならば、同時期のオレンセでの不自然なまでの急増（表2）も教会主導であったにちがいない。俗界の一般民衆が自発的にホセフの名を採用するようになるのは17・18世紀交以降であろう。18世紀半ばには11市町村すべてで、ほぼ安定的に9～12%が採用されるようになった（表3～13）。しかも1市で一位、3市で二位、5市で三位、2市で四位を占め、一位のタラベラでは7人にひとりがホセフを名乗るまでに増加している。他方サンティアゴでは7.8%（4位）で、11市町村中もっとも少ない。北部のその他の市町村もすべて10%以下である（トゥイ9.3%、ポサ9.2%、セルベラ9.5%）ことは、またしても時代の潮流にたいする北部の保守性を示唆する。他方、半島中央以南はどこも12%以上である（タラベラ14.0%、グラサレマ12.3%、ランハロン12.4%）。

このヨセフ崇敬の浸透度の違いは、なにに求めるべきであろうか。私見によれば、16～18世紀における聖画の展開と大いにかかわっている。ヨセフ聖画の展開については別稿（芝、2010）で詳述したので、ここでは概略にとどめる。ヨセフは聖画に初登場した中世末以来、つねに深い皺を刻んだ顔に禿頭もしくは白髪の老人として、後景や端に佇む姿で描かれてきた。しかしトリエント公会議後の16世紀第4四半期以降、とりわけ17世紀、スペインにおいてのみ、聖画「地上の聖家族」でマリアと対等の重要人物、さらには主人公としてマリアを圧するまでに描かれるようになった。しかも、黒髪で逞しい30過ぎの相貌で、ときにはイエスの面影さえ宿す。壮年ヨセフを前面に出すこの革新的な聖画は衰退期の王国にわずかに存在した、宮廷とアンダルシアの二画壇を中心に、マドリー、ムルシア、セビーリャ、グラナダなど、半島中央以南で制作されたことがこれまでに判明している。妻は神に仕えるがごとく夫に絶対的に服従すべしというキリスト教倫理にもとづく、家父長制およびジェンダー（男女の社会的役割・要件）を教示するモデルとして、異端審問所が直接的・間接的に画家たちに指示し、画家たちがそれに忠実に従ったのである。

18世紀には一転して、幼子イエスを母親のごとく抱きよせる「乳父ヨセフ」や少年イエスの手を引いて歩く養父ヨセフの聖図像がやはり半島南部・南東部で数多く制作され、両者の親密な関係が喧伝された。こうしたヨセフの図像化が人びとの信仰心や命名行動に大きく影響したと考えるのは的外れではないであろう。ヨセフの重要性が可視化された地域において、崇敬がより早く、深く進行するのは当然の成り行きだからである。教会によるヨセフ崇敬の奨励策がそうした地域で強く、あるいは、より早く功を奏していたことになる。上述の国立統計局資料によれば、現在もヨセフ名の高頻度地域はガリシア以外、半島南部と南東部に集中しており、命名における地域的特色に持続性があることを示している。また18世紀中葉、現在のホセ José という形がカルモ

ナのみでわずかに（6%）登場した（表11）ことから推測すれば、全王国レベルでホセフ Joseph/Josef がホセに代わっていくのは、ヨセフ崇敬が民衆に広まったとされる19世紀になってからであろう。2009年現在、ホセは単名・複名（部分）の使用をあわせ、抜きん出て1位である（1,000人中128.1）。これほどまでの人気は、教会主導ではじまったヨセフ崇敬が途中から自律的展開を遂げた結果であり、「万能の聖人」に頼りたいという民衆の気持ちを直截表している。

ホセフの女性形であるホセファは17世紀末まで存在していなかった。たとえばオレンセでの最頻18名のリストにも登場しない（Poska, 1998）。小論が対象とする11市町村中、女の名のサンプルが一定数（230～2,400人）を確保できた6ヵ所をみると、半世紀後の18世紀半ばにはかなり浸透していることが判明する（表14）。サンティアゴではマリアに次いで2位、セルベラ、サン・

表14 6市町村における女の最頻名の順位とその割合

女の最頻名の順位と割合（男の名の割合）							
市町村	サンプル数	マリア		ホセファ		マヌエラ	
サンティアゴ	513	1位	20.3%	2位	7.8% (7.8%)	9位	2.9% (5.0%)
セルベラ	372	1位	26.3%	3位	8.3% (10.0%)	2位	14.0% (24.0%)
サン・セバスティアン	234	1位	22.6%	3位	9.0% (9.5%)	2位	12.4% (22.8%)
ランハロン	704	1位	25.6%	3位	5.7% (12.4%)	6位	2.3% (8.4%)
カルモナ	445	1位	22.9%	7位	3.6% (10.0%)	8位	3.1% (8.2%)
グラサレマ	2,428	1位	31.8%	5位	6.7% (12.3%)	16位	0.9% (0.8%)

セバスティアン・デ・ロス・レイェス、およびランハロンでは3位である。しかし、使用率が同じサンティアゴ以外は、どこもホセフよりホセファの使用率が低い。これは、男の名にはないほどマリア名に一極集中し、その使用率が際立って高いこと、およびほかの名の集中度が全般的に男の場合より低い傾向にある（表15）ため、その分ホセファの採用に消極的だったことが影響し

表15 名の種類と集中度

市町村	男の名		女の名	
	種類数	集中度/人	種類数	集中度/人
サンティアゴ	127	21.6	78	6.6
カルモナ	104	25.5	62	7.2
バリャドリー	97	14.4		
グラサレマ	79	36.5	78	31.1
タラベラ	74	9.2		
セルベラ	64	5.3	58	6.4
フミーリャ	63	11.2		
ランハロン	62	11.8	87	8.1
ポサ・デ・ラ・サル	58	7.5		
サン・セバスティアン	56	5.0	53	4.4
トゥイ	52	7.3		

ていよう。この状態は現在（2009年）にも当てはまり、ホセファは完結名では4位、単名・複名では7位である（<http://www.ine.es/tnombres>）。

(3) マヌエル

近世に誕生したもうひとつの新しい名は、マヌエルである。「神は我らとともに」の意のヘブライ語「インマヌエル」に由来し、イエスを指す。ホセフと違い、中世にも存在したが、使用例はきわめて少なく、近世に新登場したといっても過言ではない。オレンセでもこの名は1620年以前にはないが、世紀後半、突如使用頻度が5位、6位に浮上する（表2）。翌18世紀半ばには11市町村中9ヶ所で上位6名に入るまでに増加した（表3～13）。なかでも、セルベラ、バリャドリ、サン・セバスティアン・デ・ロス・レイェスでは一位を誇り、各々22.8%, 18.8%, 16.7%を占める。短期間でこの驚異的な増加には、ホセフの場合同様、教会の強力な介入を疑わざるをえない。それに対し、4、5位を占める中位グループ、北部のポサ・デ・ラ・サル（8.9%）とトゥイ（8.0%）、中部のタラベラ（10.2%）、南部のランハロン（8.4%）とカルモナ（8.2%）は、民衆の自発的採用を反映していると解釈できる。他方、東部のフミーリャ（1.7%）、南部のグラサレマ（0.8%）は極端に少ない。ただし、マヌエルと同じく、イエスを意味するサルバドール（救世主の意）名は半数の市町村ではまったく登場しないにもかかわらず、グラサレマでは例外的に多い（2.8%）⁶。とはいえ、マヌエルと合わせても3.6%、フミーリャでも2.4%にとどまる。北西端のサンティアゴ（5.0%）とともに、これら下位グループはすべて半島の周辺部にある。ことにグラサレマ⁷は半島最南端県カディスのロンダ山系山麓に位置し、他の市町村にくらべてひととき孤立性が高く、教会の施策が末端教会まで届きにくかったことが示唆される。

以上の数値から窺えることは、教会によるイエス信仰の振興策はヨセフ崇敬の場合とは逆に、メセタ北部で積極的に展開され、そこから同心円的に半島周辺方向に広められつつあったが、周辺部ではいまだ十分に浸透していなかったことである。グラフ1をみれば、全地域においてほぼ安定しているホセフにくらべ、マヌエルの地域格差はきわめて大きいことは一目瞭然である。これはまた、教会によるイエス信仰の振興策がヨセフ崇敬の振興策より遅くはじまったことを物語っている。しかし現在、マヌエル名は18世紀中葉の傾向とは正反対に、周縁部と南部が多く、かつて1位を誇った上記3市町村がある中央以北の中央部は最少である（<http://www.ine.es/tnombres>）。教会主導の命名が一過性であり、地域の伝統として根づかなかったことを示している。

では、なぜこの18世紀になって教会はイエス信仰を振興する必要があったのだろうか。イエス信仰の奨励は、民衆間におけるマリア崇敬のさらなる高揚と関係していよう。マリアはキリスト教が民衆間に浸透しはじめた11～13世紀以来、本論の対象地域では女性の最頻使用名であり、はや12世紀のアストゥリアス、13世紀のガリシアでは3人に一人がマリアであった（Portela Silva et al., 1995; Ruiz de la Peña Solar, 1995）。キリスト教が地中海地域で受容された際に、太

古からの大地母神という古層にマリア崇敬がいわば接木されたため、当初からマリア崇敬が強かったのである。マリア名は17世紀前半のオレンセで平均39%、名の種類が増えた後半でさえ平均26%を占めた (Poska, 1998 より算出)。4人にひとりがマリアである。18世紀半ばの6市町村のどこにおいても (表14)、マリアの使用頻度は群を抜いている。最少のサンティアゴでも20.3%、最多のグラサレマでは31.8%にもなり、約3人にひとりにはマリアであった。このマリア名の多さが示唆するように、同世紀、キリストを見捨てて母のみを崇拜していることにスペイン人自身が驚愕した (Kany, 1970) ほど、マリアのみが信仰の対象となっていたのである。

教会は過度なマリア崇敬が四位一体になりかねない危険性を中世後期以来認識してきたが、近世後期にますます高まる様相をみせていた民衆のマリアのみへの傾倒を、キリスト教本来のイエス信仰に引き戻す必要性を感じ、説教や洗礼時に信仰の重心移動を促したに違いない。その施策の結果、セルベラ (表5)、サン・セバスティアン (表8)、バリャドリール (表7) において4～6人に一人がマヌエルとなったと考えられる。マヌエルの女性形マヌエラも、前者2町村ではマリアに次ぐ第二位を占める (表14)。また、それまで存在していなかった、サルバドールの女性形サルバドーラも3ヵ所で、わずかではあるが登場しはじめた。国立統計局資料によれば、2009年時点でマヌエルは単名・複名 (部分) の使用をあわせ4位 (1,000人中59.7)、1位のホセの半分である。しかし、11位のヘスス (イエス) (同、25.4) をあわせれば85.1となり、アントニオ (同、67.5) を上まわって2位となる。完結名としては3位のマヌエル (1,000人中29.2) と9位のヘスス (同、12.9) を合わせれば、1位のアントニオ、2位のホセを越して1位となる。キリスト自身への信仰を促す教会の努力が確実に実を結んだことを示している。ただしその一方で、マリア名は2009年時点でも1,000人中271.2人に及ぶ。4人にひとり以上がマリア (単名もしくは複名の一部) である。マリア崇敬への一辺倒は是正されたにせよ、その根強い伝統はいまだ現在も生きつづけている。

6. おわりに

18世紀半ばの世帯台帳等に登場する個人名の分析から判明したことは、対抗宗教改革の牙城化した近世スペインにおいて、教会が一般信徒の信仰のあり方を誘導していたことである。カトリック教理にもとづく家父長モデルとしてのヨセフへの崇敬を17世紀から信徒に促し、18世紀にはマリア崇敬へのさらなる高まりへの懸念から、本来あるべきイエス信仰への引き戻しを図ったのである。

個人名についてのこの分析結果は、別稿 (芝、2010) でおこなったヨセフの聖図像の分析結果と完全に一致する。スペイン教会・異端審問所がさまざまな手段・方策を用いて、家族秩序や信仰のあり方の教導に努めていたという事実である。さらにそれは、上掲稿でも取り上げた、バロック演劇への異端審問所の徹底的介入が示すように、スペイン近代社会における倫理観・価値観の

正統なるキリスト教化という巨大プロジェクトの一環をなしていたのである。

注

-
- 1 たとえば中世期には7言語が存在し、現在でもそのうちの4言語がそれぞれの自治州の公用語として生きている。西欧において、さして広くもない地域がこれほどまで著しい多様性を包摂している例は他に類をみない (Douglass, 1988)。
 - 2 半島北東部のカタルーニャ地方はフランク王国のイスパニア辺境領に編入されたため、社会構造をはじめ、心性・文化などもフランスの動向と軌を一にした。姓名にしても他の半島の動向と異なる (ゲルマン系が多い)うえ、18世紀の世帯調査の対象外でもあるので、小論では考慮に入れない。
 - 3 ポルトガル語はガリシア語とフランス語の混淆から生まれた。
 - 4 多数の同名者を区別する必要から、2つ名を連ねることによって名本来の認識機能を回復する目的で、近世に出現し、とりわけ人口が増加に転じた18世紀に増えた。
 - 5 完結名とは、それ自体で完結した名となっているものをいう。単名が多数を占めるが、複名も含まれる。
 - 6 現在もサルバドル名は南部・東部の周縁部に限られる (<http://www.ine.es/tnombres>)。
 - 6 「地中海人類学」の幕を切って落とした、J.ピット=リヴァーズの『シエラの人びと』のフィールドの地である。(シエラは山脈、山地の意)

文献

- Bourin, Monique, 1989. 'Bilan de l'Enquête: de la Picardie au Portugal, l'apparition du système anthroponymique à deux éléments et ses nuances régionales'. In: M. Bourin, ed., *Genèse médiévale de l'anthroponymie moderne*, t. 1, pp. 233-246. Tours: Publication de l'Université de Tours.
- Centro de Gestión Catastral y Cooperación Tributaria, 1990. Carmona 1751. Según las Respuestas Generales del Catastro de Ensenada. Madrid: Ministerio de Economía y Hacienda.(以下、Según 以下を省略)
- Centro de Gestión Catastral y Cooperación Tributaria, 1993. Cervera de Pisuerga 1752.
- Centro de Gestión Catastral y Cooperación Tributaria, 1996. Grazalema 1752.
- Centro de Gestión Catastral y Cooperación Tributaria, 1990. Jumilla 1755.
- Centro de Gestión Catastral y Cooperación Tributaria, 1992. Lanjarón 1752.
- Centro de Gestión Catastral y Cooperación Tributaria, 1991. Pozo de la Sal 1752.
- Centro de Gestión Catastral y Cooperación Tributaria, 1994. San Sebastián de los Reyes 1751.
- Centro de Gestión Catastral y Cooperación Tributaria, 1990. Santiago de Compostela

1752.

Centro de Gestión Catastral y Cooperación Tributaria, 1991. Talavera de la Reina 1753.

Centro de Gestión Catastral y Cooperación Tributaria, 1990. Tuy 1753.

Centro de Gestión Catastral y Cooperación Tributaria, 1990. Valladolid 1752.

Civil, Pierre, 1995. 'Le modèle du ménage heureux: l'image de Saint Joseph en Espagne à la charnière des XVI^e et XVII^e siècles'. In: Augustin Redondo, ed., *Relations entre hommes et femmes en Espagne aux XVI^e et XVII^e siècles*, pp. 21-37. Paris: Publications de la Sorbonne.

Douglass, W. A., 1988. 'Iberian Family History'. *Journal of Family History* 13-1: 1-12.

Durany, M. Y Rodríguez, M^a C., 1995. 'El sistema antroponímico en El Bierzo. Tumbo de San Pedro de Montes. Siglos IX al XIII'. In: P. Martínez Sopena, coord., *Antroponimia y sociedad. Sistemas de identificación hispano-cristianos en los siglos IX a XIII*, pp. 73-102. Santiago de Compostela y Valladolid: Universidad de Santiago de Compostela y Universidad de Valladolid. (以下、副題、出版地、出版社を省略)

García de Cortázar, J. A., Díez Herrera, C., y Peña Bocos, E., 1995. 'Antroponimia y sociedad del Cantábrico al Ebro en los siglos IX a XII'. In: P. Martínez Sopena, coord., *Antroponimia y sociedad*, pp. 231-258.

González Vázquez, M., y Pérez Rodríguez, F. J., 1995. 'El sistema antroponímico en Galicia. Tumbo del Monasterio de samos. Siglos VIII al XII'. In: P. Martínez Sopena, coord., *Antroponimia y sociedad*, pp. 49-72.

<http://www.ine.es/tnombres>.

Kany, Chales E., 1970. *Life and Manners in Madrid 1750-1800*. New York: AMS Press.

Martínez Sopena, Pascual, 1995. 'La antroponimia leonesa. Un estudio del Archivo de la Catedral de León (876-1200)'. In: P. Martínez Sopena, coord., *Antroponimia y sociedad*, pp. 155-180.

Portela Silva, E. y Pallares Méndez, Ma C., 1995. 'El sistema antroponímico en Galicia. Tumbos del monasterio de Sobrado. Siglos IX al XIII. In: P. Martínez Sopena, coord., *Antroponimia y sociedad*, pp. 21-48.

Poska, Allyon M., 1998. *Regulating the People: the Catholic Reformation in Seventeenth-Century Spain*. Leiden & Boston: Brill.

Rodríguez Martínez, Luis, et al., 1984. La devoción popular a San José en el Antiguo Régimen. *Estudios Josefinos*, 38: 225-249.

Ruiz de la Peña Solar, J. I., 1995. 'La antroponimia como indicador de fenómenos de movilidad geográfica: el ejemplo de las colonizaciones francas en el Oviedo medieval (1100-1230)' In: P. Martínez Sopena, coord., *Antroponimia y sociedad*, pp. 133-154.

芝紘子, 1995 スペインにおける姓名システム—その由来に関する一考察. *西洋史学* 178: 1-17.

-
- 芝紘子, 2001. 姓名システム—命名革命と結合性の由来. In: 芝紘子、スペインの社会・家族・心性—中世盛期に源をもとめて—, ミネルヴァ書房, pp. 101-166.
- 芝紘子, 2004. 旧体制下のスペイン家族—18世紀半ばの「エンセナーダ世帯台帳」を分析して—. 比較家族史研究19: 32-72.
- 芝紘子, 2010. 地中海世界の〈名誉〉観念—スペイン文化の一断章. 岩波書店.
- Shiba, Hiroko, 2010. 'La revolución antroponímica hispana: la aparición del apellido y el mayorazgo'. In: Joan Bestard, coord. y Manuel Pérez García, comp., Familia, valores y representaciones, pp. 51-74. Murcia: Universidad de Murcia.
- Villaseñor Black, Charlene M. V., 1995. Saints and Social Welfare in Golden Age Spain: the Imagery of the cult of Saint Joseph (authorized facsimile of phd. Thesis). The University of Michigan.